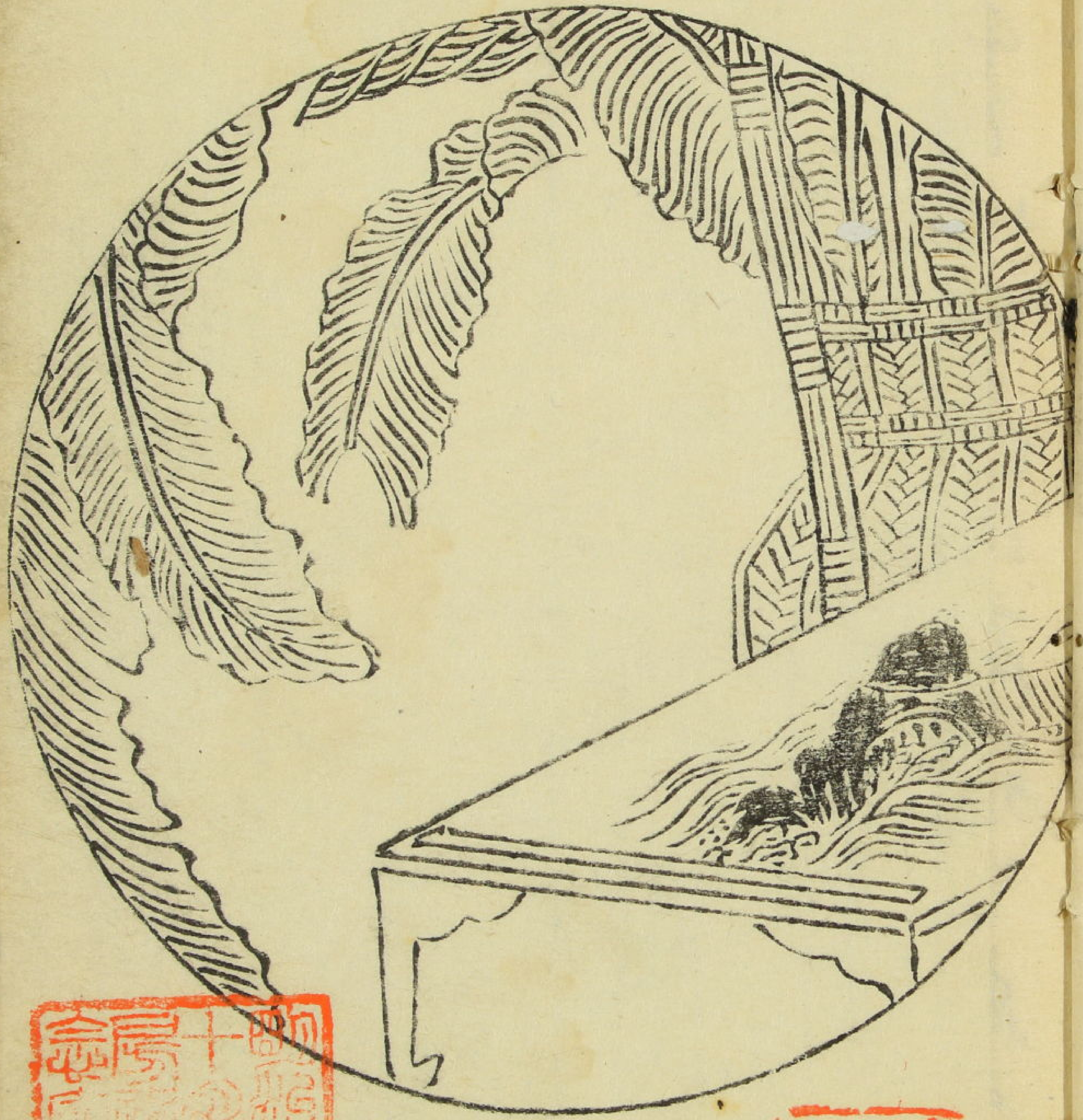
附合小鏡

へ 5
1927

門 へ 5
號



章堂私印

俳諧附合小鏡序

太を鏡とし細をかゝみとすと是ハ
外史か詩を世あしく宴み文
境あり栄四時乃変化造次と川
さしはと以てかのなしかの百花乃姑息
小雲ハ亭陌の落穂をもろひ
籬隣根の田井乃香をと游ひとも
あなしらす龍芳れ細をかくしみ
俳諧乃語は扣ひを画よつく
春のよそ何にふる門の書乃師傳と
いふなあらそふの誌なし吾中
老師是をとはやき手に筆を成
よりて小冊子なをつとは書肆

西邑翁ちてまかなか附合
小かゞみと號けゝるもの
安永四乙未孟春　雪星觀牛家

俳諧附合小かゞみ

目録

一　三物之事　并發句之盃の説
一　意上中下初中後之事
一　附合三段之事
一　同に遣之事
一　執中之事
一　附句に季を結事
一　月花之事
一　色字之事

一 秘正之事
一 三句同之事
一 付之事并故事古歌取之事
一 畳字之事
一 序破急之事
一 附句ニ新古ある之事
一 一座禁方之事
一 恋の句数之事
一 仮名遣之事　古人略傳加之
以上

俳諧附合ニ加之

雪中菴蓼太編
門人牛家著

三物解

発句より第三までを三ツ物といふ脇より外第三より二様あり師によりて学ふへし

一 発句脇第三ハ起定結合のおもむきにて名詩乃格式也 起とハ四時節景物に対して一物あるき亦は情を起し十七字に結ふ是発句之

完とハ発句を梅なりと也よ常るなと
也よそ梅の花に深く咲きを場を定め時をさ
合せ発句よ云ひお論を補ふなるて
往定客の人之転ハ発句照を一連の
お句とおかし天地より人乃生して有抱
継ふるまして又見より一紀をまた附を
徹細よせん二句乃懐ゆるやかに遠をよし
ゝとに其間ハ合の場なる有負おみ仙乃
読との書て詩乃結と遠く家よ習あり

詩乃起承転合ハ

薄暮蒼崖帰雲遶腰　傾盃一雨定明朝
老翁八十眉如雪　立馬渓辺独木橋

此句の人を夕暮より立出して遠山くの
麓を雲乃めぐる遠風情なりと聞く趣を
かくのける詩乃承の明朝ともなり是ハ
発句と脇乃一体之対六此山乃日和なとを
尽見て遠八十の翁なりかくのごとく発句
照の情を転して察情二句を付て人よ

第三ハ人情二句まて風景時候時分等に
一轉せし也取古人の二轉に工夫すへし

春

發句 若菜　脇 春の雪　第三 鶯

若菜摘乃手を霞める若菜哉

吹上つゝ春の雪かな

鶯の鳴かしらぬ鳴もさへつる

發句 梅　脇 雉子　第三 春雨

梅か香の川と見ゆ出る山路哉

啼く声雉子の鳴川

春雨を春はに遠くもとりつゝて

發句 鶯　脇 礼者　第三 薮入

鶯や軒のさきなり羽拍子

礼者らしくも春は静さ

薮入の古庭似合ふあらしくそ

夏

発句 題しらす　脇 水鶏　第三 雨

そらまめ乃花咲ハかゝり麦の塚
道の水鶏乃なかる溝川
上汐を通さぬ宿の雨ふりて

発句 夏の月　脇 門涼　第三 時節

市中ハ物のにほひや夏の月
あつしあつしと門ゝ乃声
二番草取りも果さす穂に出て

秋

発句 蟋蟀　脇 芦の穂　第三 旁

蟋蟀の翼をかくる西日の舞
流落る芦の穂ゆらく
秀の外乃緑を満す松を乗て

発句 きりくきて　脇 秋夜　第三 居家

灰汁桶の雫やみけりきりくす
油かすりて宵寝する秋

新題なしとも月並年

發句　初草　　招　岩川　　才之　留他

初草やまさ日影の秋の露

まだ萌草溜らる岩川

聖なりし居村の鐘跳さまりて

終て

發句　初時雨　　招　水の葉　　才之　旅人

鶯ハ程とかはれ流くる船の初時雨

ひとふく風の赤城寒き川遠

後行の新く涌る　川越也

發句　霧　　招　橋　　才之　氣情

霧のまへ今日や小斗の星乃影

気比の青く畑る晴の橋

むら番橋の景く魔る松影かて

右也ハ二番の説

右句月より揚句まで二折と遠く附句千變

万代也地蠟皮肉骨の如くあり其句を聞に
竹の作にて眼にみゆへし然るハ叙あり以て
附添との末誠なし手紙なり無々也
おかしみをこゝろにすへの遠也たとへハ
　先春の井に煙草盆哉く
何ま（て）阿蘭陀の小袖上下厩
されとも此句を二ゑ見も是非にいらぬを
聞ぬやうに人の肝にある人々の事ニまさ
おもふて俳諧乃相当なる是ゆへ也

加の蔭云小紫ともいへるはゆゑ
出る俳風情なしんと

　又

　ひきたる中ゟ網ぬれて盆
後者ゟて小坊主に掃かす
何ゑ後の後者掃除帰除白上ゟあらふ

　限のかなる奥の提ぬれて盆
花君ハ浅黄綸子に丸頭巾

此庭ゆかりの花につき添切気ゆかし此
とめく揺るゝたゝえの風情なり

、
該行志ゆゑ大名衆に新出
繁魁く將基所に本会雅
是一重さりの花眠に遊はされし處之の
天せ尖なり

咲なし前此揺たゝえん
菖蒲くてさ河路をそよ咲よそげ
会津との咲さし前なる菖之佳也
高総新そおなるへし

、
不こりたゝけの塗物と盃
麦秋のうちハ出来れ何れた夏
同く咲たゝとあおりし塗たくこゝろんと
あきハ風姿かくりて円金なるかりの麦秋
さもあるへきゝさ此そ螺茶盃と年よ

皆予も只一色なりし聞ゆ是へ末ハひとつに
くゝりて附句もそれに随へし

意上中下

一 意を考へて賤となく只一情なる和歌
にも連俳にもあらぬ意を遂くあハせ俳意を
趣きなくなり卿の附句にても上中
下初中後あるへきにもあらし

上

東路[illegible]千鳥しきりゆく[illegible]の数

うつろふ境は機嘆かなしく
上着の人はなほ夕化粧あり我せこ
事にまとひたる人さしみは歌のかなしひ
うきて声もともと右を乃おもかけなく
さめやらる夕顔の花の見情もあらん元

中下

法は岩は都枯く

嘘かりにすることを筆を捨なる
川竹の風情ありしみの屋り事いふなと

あるを女房ぶりてよ呼ぶる半沢ばそ根
あらん緒はうちにょ続きて中品の意と
いふべし

下品

田楽事色の白き麗人

花月ばかりなるさを意と捉へて
君いとをさなき扇は糸思ひ合せさするる
そうりと表衛門の節なり意なさる衣
おもしろくも美女の麗人見るを様せるなる
なるを無紋白八間て意なるとかくる附句も此
作りなり

初意

押へし色てもをてめ初意
雲の掃ねも紫ぶくしく香る

大川谷の祢すげたりし新らしくあるを見
為る作りざき意なり中にも初る女も
さしめきしる雲の如いまさるとと附
る也

父母愛女女　女是聡明子
生不識然誉　繍出然誉是
是亦然余情也

中意

引さく琴なる絃起請なり
吉文ところしの数を括出し
きのふの情の例なるよりけふの紬乃
実なるにあはしきを含て中の
意ともへそんか

後意

梳の身を解きなくさむ
髪結ぎ幽界とりあはしく
揚貴妃は川く唐帝のおもひ李夫人
去て漢帝はおさけとありし風月のつきく
あるこの反魂の薬まあしまほしきに
楊貴妃姿情は六経まそしくなし
よりて文る法集のくちよまと撰せる
是を讀て文也へし

おち 根くよふかくし[illegible]悲しき

附 浮世果ては 皆小町なり

おち 六八重の千世栄さむも八の[illegible]

附 馬耳 [illegible] 悲しき

おち 菜をころふ麓中の秋

附 [illegible]悲しきを 見ても会[illegible]を[illegible]

おち [illegible] 迦陵頻

附 眼 [illegible] 悲もなく

おち 我[illegible] おもひ浮世一人

附 此悲をいたんとすれて [illegible]

おち [illegible]

附 下紐のむすびある[illegible]

おち 我 年にあり[illegible]

附 悲しよりかれ 悲は[illegible]

おち 長女(ヲカツ)[illegible]

附 かくし [illegible]もよさん

おち 口[illegible] 石佛の[illegible]

附 唖の悲[illegible]

附

前句 傾城のそはゆかしあらし

附

痿瘵紳のかくさ蛙皮揃ふの好き

前句 志とやうに打ちふ庵子の古瓶

附

封もそのまゝ師走の文

附合三儀

一 前句に對して趣向を定る事

一 前句に對して新古虚実のさた

一 前句に對して拔打仕事

一 寄合

一 句代

一 てにをは

附合四道

一 響

前句の人情動きを嫌ひ附の一響なき後の附句にかはりなかるべし

一 随

前句の姿情を飾らず志さらぬ下

一 放

前句に對して風雨寒暖陰晴昼夜の縁をもて合し

一 逆

前句の姿情を見まはし返して捨てる附句とすべし

執中之法

一 芭蕉翁は此條のうち附句に執中之儀の寄合の

法ありて執中とハ中をとるといふことなり
業方の肝要にて源氏物語なとの大綱
あるものも次千の文より筆をとりて
前後ハ枝葉ありて浮留行の冗長續を
先に後めのおもしろき所を縦しくさせて
初後ハ窮屈のあり附句もれのごとく
前句に對して附居なども一字二字
三字にハ至りたるを無されハ句も向うて
題句を求るに運し夜に至りて執中の

法を用ゐしハ一字二字にて其文字を
加へ然もしちゞめもして二句連綿せる
ごとくなりて附句を連の意を切たるにして
中にハ糸をひきて情のかよひあるを
よしとす是流れ絲しくといふも無んなや

例し　折枝花かゝる肉桂
梅を蒸庭炭あくなる草枕
附き　蒸花一字
糊張き襷に秋を寄せうるゝ

髪ゆふ髪をとゝ乞食天給ふり

附て 壱の一字

手紙をもちて人の名を問

な睡ゝ起出てをのゝくかしこまり

附て 振舞

此秋も門の板橋崩れけり

殺免てめくりて独見る月

附 左近

鳴子おとろく竹藪の窓

盗人につまゝる妹の身を泣て

附 盗人の妻

附句に季をむすふ事

一 附句の春雑り秋らりにて初心の人先
季あるより案するまゝにて前句の全体に
附る季は前句の心をかりて附る例の
執中なり 又は三句めにもよく[illegible]
附て季あれは[illegible]附て
季は一代足下等一と世先師と申此

或紀行

鬼ゆかる旅寝ハ人泣せる
焼飯の花も見るゝ六ての仏陀
此所の銭に人来あり村人にの大
なれたるしくと云ふもと例の娯乃
若草頭を踏出しかくのごとき師の曰
かくのごとき季立のしのあらひ余を
余輪に一作ありしとあり平服を問て
おもれありとをつくまで花もすき数

三月下旬服の仍りかけ拙あれと。
秋を隣に麦あしこらへ
師の云ふかく季立のありひ遠を捜
さんしと足下に玉ありこれを思ふべしと
ありけ季乃ありひあるすを身に
捨ふ是を讀で了ふ事べし
お白
青立の心と云に見て
おもひて見の聞くへ角
併を見てたちあらひ

曰
廣くをさまる秋風
新しん雛ありしに落葉
心は川ほとへ落紅葉おもしろひ

曰
宮川にまへる中ある月の影
繪書ありときくさ剃刀
心は一筋剃ハ繪書ハあらひ

曰
下よりも強の成就なり
剃捨てせんやく屋菱形九十九髪
心は売生ありて屋台をあらひ

曰
いよいよ悪き勝負を取く事なり
武漢對手何事し難の無
心は儀釈ありて気をあらひ

曰
稲荷の茶屋もあるある奥乃
まないより乳母にたくさむに紐ふて
心は乳母之に紐をあらひ

曰
蛇の跡形尾も出く波岩より
纜を解て渡舟の支度
心は渡人支度何らひ

月

きらふも　ひとつ次第に付事

古歌すらよく其風の事に心得ある輩

附ても古歌之其風をあしらひ

月花の事

一 月花の句を一巻に陰陽ありなくて

あしらひ道理を知てあしらひの付ある句

なりとも月花を一巻を潤下とは不縁に

あらされともそを句を見よまて只月の

花のとあしらひて只附ぬ句あり其文

附句に季を結ふて月花を句の風に

かくて御詠し此頃武人の句有

嵯峨しよろしきて赤子添竈

宿をたて花の孫生も嫩枝月

右附結てて一句の継句ハ宿気にして

月と花とハ句脇の用に赤子のせりり

に添ふ故のあしらひ余情々きくなし

相おも一首出事て名月

御秋に叢ても花は郡おと

附そ旧哉なり花ハ句作の関之ニ花なる
趣く加ハ可倚著巫人のお句を出せる也
乙児ヶ只何の気なく附よふして席上ニ皆
香を吐了

醫者ヶ寄くてあるは折ハ成之
舊笠年花伏林と出てすく

是も花なり比祝則なり附る句ハ老人会
老らく人もらん至し其花の一字を専なり
句作也尾城の巴静ヶ席上の人を感せ
之海させし附句なり

枕ふふ川鶯虫をまなりを
浮ふ歩をまいすす花の流月比浪

浮ふ歩そ應の何もらひまして行向く舟
道遙也月と花とハ句作なり

椒同比唄ふなり我 斬
月をむしら風の貝の酒

附る山依比依枕すて月を句作なり
かんかんなる七夕比照

名月は高く照らして芋畠
前句七夕の題とあれて表立の句なり
よりて附は芋畠よりて月を句作之
　嘆聲の夜会は浅から深く
附は
　猿の聲しきく明月は月
附は妻人月をあしらひなり
　むしくと淋しさる石の上
附は
　浅き乞食は旅やすき月
附は乞食月をあしらひ之

　曲は前出る二月朔日
　初花よ伊勢は艶のそれ禁へ
附は伊勢の海川くはらをあしらひ之
　曲　実芙付る妻は扇枕
　花の露月は朧もそれなかりし
附は様見之月花を開發結さしらく
　立働く姿あちこちあり又月花は月
お句は紀者よ切者不切者の人
前句一字附ハ様よきあしらひ真也

附句ニ骨をりせぬ之三吟 来山花初折乃
花ニ秋の三句めあるを 露乃雑ニせ
まゝ小男鹿と翁の附られしを是
妻鹿を其まゝ枝まで何くすゑ迄
あるの鹿ニして一句ともりして雑也
よりて秋無之花を附るも附しなき
ちくましくとおもひ侍り名人の心
つゝひ始学の飛着おもふへし

色字之事

一 二十五條ニ曰発句附句ともニ前句の情ハ
さる時ハ眼を閉て独中ニ画をとめへし
と色画を見る事ハ人事のまゝにとりて
形あらはれず情中の画画中乃詩とある
いふ事也へし

龍をきてまことなふしくものにいでしこと
凡をふかしく白川の実
志つくしまつけむ秋の月新ニ
香うくさまんけりて楢の葉秋

初のおもき紅乃色字あまた有枝をさし
梅乃傍も白の一字を尋ぬるも合ぬり魂を
詠まる遺都珊瑚鞭白馬驕不行と
少年乃の綾羅を飾て秋吉乃詩も
白貂紅葉是色字をすゝめてかりとかや
当世にて貴妃小町といふも衣服あしくて
似合ふこうすゝ合ふし映ましやなし七夕
七くの風姿も彩色なんぞ自て我のまゝりを
人乃耳に落候

白字

綾　白くと義を申すなり
ほてハ上臈此落人なりし容あしくなりぬべく

紅字

紅綃　赤くと義をと申すなり
かくてハ上臈も人こそ舞子縄珠
赤き引きしろきあるなるの一具にも
見る由係之

青字

酒盛ハ青須せり如しとあり
下戸とも病ほとも素の字無益あらん生
より世間まてを言ひける時をまち銭芸者の
無用時の風俗よりて答え明ありて天地よ
受けるとの何らか色をも知らす事あらん
發句粉色字を以風無定する句多し

粉正し事

去たり何ゆする魚屋の盗人
母の眼無事しぬ去環を泣なりて

一 去り波みえ深しき由も新附之備無く
忽貪老乃孝心まむりれて盗もいと無ふ
らしくかの多けき武士の心も和らぐ條に
かゝる取あらん是能を轉して正よ郵
老まりて不孝ふ與不義の句をと膝原也
其一なり惜實採いふ句ハむかし楽
いひけり作無く骨髄をかくらして
釈迦のあさのとるを文慶無のすへりて次
是俗後平俗をたてまとつ俳諧乃

一益なり

一　二句同じ事

附合の二句めにて粉骨を尽し其之蕉門の
作者おほくハ二句め立の結乃まく人情二句
續きたるや三句めにて冬の集此翁の書乃と
述て一巻かなし古集の骨折を師に
学ふて後の世之心さし集本
多くはとめちかく作なす
難を見とをきりて浮なる

無理に出て紀を結のひらり
其州よ紀の関あるかくなり
海て元まて実あらん

双六の同をのまくに並る也
好人車續後を加ゆく越の此法
其見を負続地日紀に運義来と
いふ也ハ其外に立作者の一己の手柄也
逆義来を引のけく詠ひなく兵名
城陣に近付るまく名人の交なる一巻と

秋の事く自他の此所してこそひやすし
然ハ句乃解をいふて先其ほどの力
さへなきと云句ハ自也其人の意ある
君にて附るも日をいふこしの及ぶ事
上滴と附て他あり是を花山の上皇
かくの御傳と見て然也人に知らる法
句ひりと又他あり聞ゆる近附にして
御て元よりも薬をおく人也政云の句ハ
一座の大場に附ちしてハいふ大場

すべて人是翁の料骨なり云句のよしあし
先第せ説句として変なるべし

俳諧の句無故事古歌なとの事

芭蕉翁も古くより人まかり
今のましき撰集には淡太

一
翁曰俳諧の句ハかくのごとくおもひ作り能困乃
境界と見て附る事あり去年西行能因と
附るハ其流にあらん事よく俳諧に附合し
又人を定ていふのよしすもあし次

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山
内義は此叫声を維
いき海維そら侍らん又或序にて宗祇
老人悲莫悲兮生別離樂莫樂兮
新相知此人を思ひて
旅は心を何にたとへむ
おもひしてもなき別をなくさむに　宗祇
かはりの心なる事をとしちれけく
つのりをしまきへ故事をおもはする也
それと云へぬやうにかまへて言しるへし
あて字之事
蓮の柵にも武蔵をからみて
武蔵は有る花の錦にまあり
一　武蔵野の有る花の錦をは紅におひ出し別
皆の青き所なる仕古所取みして同物
異形の習あり師によりて習へし
序破急之事
一　去来曰表の句序の序之の打破急の

打越なり初折二の折位三の折まて
乱さて名残の折まくさしくま合し
是百韻の法之今时乃言郎初折ト
けやけなるまとひ名残の折まくおゆき
ゆるしく位ある事と云出しヽ判をえよ
長短の点を引讃よ一首危うさを引
しや失ハん

附句よ新古ある事

一 攴考曰附句も句よ新古ある附る場よ
新古あり
墓云成題策新として古々んいて
新らん江戸代集ノ蓮之
無尚と出之事く附る故ノ取
古川氏けおく折歌ちらん

一 雑案方ヽ事

一 其角云一巻ニ秋句九句十句ありとも

一 二句雑句あしもよしはらん雑句とを
せんとよらハ却て不出来なるものなり

いまだよき句なりとも今ハ随分よ発句をと
おもふべし

一 連の句数之事

芭蕉翁曰以前ハ一巻を連の句数定ル 宗祇宗長の時代
勅にて後二句に限る又句ともある是礼式の
法之昔ハ連句一句定ある成法ハ
連をも連みけるままりに挨拶せり 又
五十韻百韻とも皆連句なけるを
一巻といへんもすさ物なるそ

仮名遣ひ之事

一 猪のいを下に出す訓

もしのいを下にするこそなりけれども

こい 鯉　たい 鯛　ぬかひ 額　かひ 貝　もたひ 甕　はい 灰

一 同下に出声

ともすれば字の下の字をもするよ

にく 肉　さいく 細　たふれ 倒　すいふ 吹

一 須をきて讀むかのこと

声を添てよむ字のこゝろえハ右をもつてしるべし

あさかほ 槿キン 蕣シユン かをる 薫クン いほり 庵アン しほ 塩エン さを 竿カン

一 ゑ 此への字

陶物 すへもの 白鞅 しりがい 飯鳫 かへがかり 堪恐 たへかね

すゑのゑハひふへとかよふかに書

おもふ 思ヒ 添ひのを 頻 かなへ 叶 ともなふ 伴ヒ

一 同ひを除るのへ字のこと

ひとのこゝろ ゆふかうなるかよふまで

さくへ 栄ふる ちるへ 散ふる すまふ 住ふ まじふ 雑ふ

一 ゑの字線上まぎらハし

もじの書ちかくまぎらはしきをの を 緒

をのく 各 をのれ 己 をふね 小舟 をしへ 誉 [illegible] 音

一 奥 此おの字

おくのおほきくおもくおりしけす 大 重 宿

をの 尾 おのれ おもふ おもへれよ 思 呂

一 袁旅 恒言のこと

をけ 桶 小をけ 小桶 をとこ 男 小をとこ 小男 をる 折 手をる 手折 男をおとこ 其外を文字

一 うの字をむとよ讀かなの事

おもむく 赴　おもむき 趣　おもしろく 面白

一 うの仮名をむの字をかけて之入

むま 馬　むまや 廏　むめ 梅　むもれ木 埋木

一 下よ書うの字の事

字の声のうの字ハに乃すたるあり

入声のうハちの色
同おハ不あり

かうこう 奉公　にうはう 女房　れうし 料紙　せうかう 焼香

一 うの仮名よふの字を書事

ふの字よふの字をかく〆入声字

たふき 犹義　らふそく 蝋燭　ほふ 法　ごせちふ竹 五節竹

一 中の元の仮名 江人正字衣之

中のえを中よゆともかく時よかく

きこえ 聞ゆる　おほゆる 覚え　こえ 肥ゆる　あたえ 誠え

一 奥の急下よ書事

おくの急を下よ出字ハあまたあり

こゑ 声　いゑ 家　すゑ 末　つゑ 杖　ゑもん 右衛門　ひやうゑ 左兵衛

一 中のゐの事

中のゐをもちゆるかの仮名をこゝにしるし

くもゐ　くれなゐ　まとゐ　すゐしゐ

一 其字はすつる仮名なき事

是かりて五音の外のかなもあり

らしゐは　ゐなかにてもぬのゐのゐす

右の外　ひ

きくいすまろよふ仮名

明闇軽重安　ヤスキ　ヤスク　ヤスイ　ヤスミ　ヤスウ　又

加あしれ五はかよりましもたしてそおほくなし

あしく出家は此かなをねひはなくて

おもふ所を書くいしるそ知るなり

歌仙

むつし雨やまくと濡て初しぐれ　蓼太
山もと夕日うつる紅葉ちるなれ　牛家
新供奉ら牛留め解かせたりふゝく　、
縫袋を運ひ入れて　太
月くもき旅乃せきやに一宿覚　、
瀬のふりかへる秋乃川音　家

〽秋さへ運ひ落葉となりし風の跡　太
下書そのまゝ円安まちく　家
寒の鐘とさゝて寂ありて　太
給者に慰そ粗衣なり　家
峯に只白雲蝉の声片便　太
茄子四ツ五ツ疫にそまし　家
富つゝある下部すてまれ集銭　太
江戸に随ふ江戸の遊留　家

淅走し雁踏て此かしれ　太
まさきさし行秋寒く入月　家
花衣脱て僧賀乃あかき裸　太
乞食の洞かくかね見え　丶
酒蘇乃世とをかしくて酔えし　家
蛛おさやかに偏泥のれ　太
都からふ遁世乃雲笠も寒　家
茶るくとも傍て解く　太

青梅の色出て透る剣なゝき　家
厨薗に句ふ麦乃夕晴　太
饒鳴と車二輪の気さ扂　家
さありて身をまかせ脊中合せん　大
去傘を別て見ゆか袖笠干　家
宵よ見え腐のきれる庚申　太
桃もも行燈断乃寺月出　家
法吉掛ふ縁寺の杜　丶

判捨く文雛角力はなはかなし　太
むゝ腕こちはらひと出て行　家
蕎麦切の勝負ハ箸と志どろなり　太
ちん娥んきふ瀬の枝に　丶
花咲める神ましくて吉野山　家
笠うち繕く春の何事の　桃筆

去年は冬籠りふさく夜の云捨を
爰にむかひ侍る

瓢中四季混雑

かへしきと時とや鮎の下紅葉　天府
折まくと折せたく花乃海別れ　蓼太
寝る夜ハ人まも寝す春の暮　魚汶
蛍や倹城ちは小柴垣　乳峰
ほ入りて身の宗井は五月雨　百貢
花身たちますかふ都の梯は　松隣
冬瓜や深狀されて轉売し　悵車
きの子ありけ何ぞえりり　杜若　富屋

はけ沢のくまき桜や郭公　如風
出代や壁に九年の一枚絵　鳳岩
草の市に隠れて咲よりけり　女　葉室
孫に人の姿繕しきほしくす　和星
涅槃会やひと足遅き数まゐり　白鳳
かゆ杖や梅ほさしとおまへし　牛家
ひとつ咲く笠のゆきする羅ぬれ　普成
花さかり木の間に松を見たりけり　子交
田に配る水と話しやかくつらき　亀米
咲てから妻幽なり柾乃留　然我
菜の花や餅つき所まで村雀　逸賀
灌佛やまくの雫を汲かへら　花口
風の吹せる所と聴ん鳴き雁　南凡
境よりと人さめくわきまき　桔梗かな　画境
松の後に隠れて白し苔の花　入左
紅葉から赤くかる見苦きかしく　婆心
老く見ゆる葛の奈を紙合羽　山幸

荒海の更て寺ゟや夜乃雪　連丈

落やまた秋とゝぬ人よ来　蓼太

白菊は色よ紫かまて惜まれけり　小奥

きゝきくや白きを深る秋も暮し　文母

葬や新き人元は月あらし　蘿羽

忘れあます押る風行り来乃雲　友路

うきまた草はゆり揺ら生て暑き柳　白雉

下戸ともよ花の嵐と詠ミけり　盤中

鷹居て菜雛くる生る時寺式　夜兎

ひつのうまに蛤とまと喰ぬ枯柳　夜梧

花見てふみ来と思ひけり　吐白

まひまみよまよふ冬寺一雲の原　長羽

男ゝ先く着なき袷ゟ柳　鳳足

数枯も米打けり秋乃風　蒙径

うたひたや地を撫乃荒の寺　楚龍

去ゝ魚て掴み来るや喰　千牛

傘さして青くゐなり来の雨　牛家

方丈の遠森を埋むさくらかな　雪冻

蕣の花も弟子に追き名於けり　貢雨

喰ましてせり卯し蕗の薹　蓼人

法ある人の地よきや夜の月　鷯斎

松魚荷乃績くや江戸乃星月夜　理牛

日をいふまゝ入りけり白重　牛家

見る月や暁りけてわすしる　仙凡

詣牽の都へかゝる月夜哉　松把

稲妻に細船ましまれ母なり　三思

蕎花や寺ありしまる盤のしく　斑象

枝折も蝶蛾のこゑて末提哉　周竹

、

白菊や花句の景を九十九髪　杉風

菜の花は黄もと落ての海唇　青雨

夕鳥や揚雲雀寒き東風　文来

夜乃ありふ葉何くれ百合の花　梅郎

村雨の月人の千々北森見哉　蓼太

藁に然飽り垣根を蕪になり　蓼房

志く〱と宍家らて故毎なれ　倉嵐

関出さはけふ哉　鏡人墓參　雪磨
水の葉ら別るゝ出るやひきかな　李今
むし鳴る鳴いハて鳴く夕哉　流光
川ならて散るをさくら乃花火かな　牛家
けふ白の水のせて見る扇哉　時中
香や鷺　鷺や我をも見まもるこ　寛平
美人やさしやく笹乃下すゞみ　子浮
岸の鮎ふ一瀬くて老の坂　笠丈
たふくを只ひと口乃牡丹哉　李院
蕗も麓北馬勒脊負ふて遠き哉　英波
秀門を形見りなりき舟しく　車童
岸ふつきの幟まて白髪翁哉　魚挺
若麦や振てもみてはけしきん　梅素
鉄炮は押分けりや燕もう　五明
むかしゟ香や門に行も琵琶法師　紫庸
手子振夜の彩や神楽　牛家
一面に手拭白き十夜かれ　石意
梅に組し炭も連理の契かな　関牛

神とのへ百味揃ふや呉春　濤川

霜しても青田を出るか蛍かな　竹條

若葉や鶴乃帰る尾の下垂　豊翁

まきらはしいつれ鶯は鐘乃声　曲川

試君とはふ子規思ひまてまち　連風

十六夜は見ぬ葛城乃神嫌ひ　彭壽

月涼し海下夕日は星ぞろう　稲里

笋や鉋に追はれ閉ひとし　如水

濡色にあやしき花の雨夜哉　牛家

鐘きゝぬ角に遅るや庵の前　土三

声のよき波寄る舟の影泊れ　故友

謡乃日の外に三日四日様々卯　連生

鶴の橋鶴る霜ゆ月夜かな　立冬

分別を春にもなめる冬籠　高城

胡蝶みや垣を見て来る女郎花　女　すゝ

きのうの露拾ふ菊園乃菊　女　茎路

流れてもまたとまりつゝ柳かな　女　尺世

冬の日や乃ち雪を停して見はらし　梅堂

ひとつはく名月とても千松嶋　牛家
塩竈やりふも捨てゝ峰の松　吐月
菜の花や裏表なき小家かち　綿衣
底清月雲まてゝ如謀々鮮　深松
嬉ひとつ星も有子捨りけ夜は月　五蘂
並乃月入身くうきき衛乱　鬼秀
萩はとれて異りの桃の花　鬼守
鴫とりやまつ深のくろき一囲より　風馬
涼風に吹きくるや更衣　鯉羊
藻の花に浮かれて出るや捨小舟　玉斧
鶯や何ゆへ帰ても脚あらし　鳴臯
梅香や詩人の牛乃尾のさき　大斗
納涼や里も月待青乃田と　車時雨
引て来る我玉の緒よ鳴子縄　祇卜
秋神と聞て越ふる秋の雲　彦長
何となく帰るや表も振向人　斑石
陣なかに蔦身を見人去剣一丁　嵐大

こゝろしらぬ中に梅咲く歌の雪　吏中
年よらぬ月こそあり枯尾花　尚白
鶉なくや誰に遠き滝の声　蓼太
盗人乃来居き月なり子規　求光
山吹や去難りかゝるさらし布　牛家
海苔の香や魚と水との心より　斗水
てらぬ寺の青簾をいふし月と梅　汀雨
鶯や去年見し柵の青まき　百境
山門や船蔵るてゆすゝき　羅光
昼まは京を翁のきぬなれ　宜麦
蛍むれと寄りて梅乃匂ひ乃符　子興
うかれ女に紙帯き月乃ならず　涼花
花なからし把燈ふ蕣の朝枕　風道
あさがほの白もうちおもてらし　牛家
鳴そめと挨ひ来る田舟かな　凱吾
去ゝ菊にかゝるれ晴る黄葉かな　麻佛
鴫の羽子松を吉へてや織月　南羅
菜乃花末の間分て照射らん　山幸

秋風や一筋きれる機乃糸　虚舟

玉笥山中

雲ぞしる六月と来る秋と　月巣

他郷

牡丹散て打かさなりぬ二三片　洛陽 蕪村

暁乃雨晴てを胡の秋　几董

家庵の天窓動すも雛ゝ聲　蝶夢

舟きやうつまでて乗す田植哉　尾 諸九

思ひ何まで猫まちやる母抱れ　浪花 旧國

風を実女なりし紫まて良くちする　米汁

こゝろまかせんとうたの柳糸　石瀬

更梅　和茶まましたて咲まなり　播州 布舟

畑うちや初雪を傍てかゝら　伊勢 入楚

岸取よ錢も崩しを八寒責　帰白

傘婦せる音のやまを踏まきり　素周

むかへる香よおとろく梅の散日哉　櫻良

夜々香や縁に掛干ん比丘尼寺　伊賀 桐雨

まりとのよ市人騒く時雨れ　尾張 也有

寒食や蛙てつゝる火より出　蝶羽
引連て汐木を拾ふ春日哉　伊豫 暁臺
誘はれて月を出けり麦の秋　筑前 祇州
さし汐や川も桂の花曇　杏扉
枕にも兎ハてけふや秋の風　蝶酔
山吹や苔の時を実乃こゝろ　東京 推
下冷や足乃下行も虫の声　豊後 葉里
入あひを吹も落り花の下　周防 以羽
実ともなく華ともなく清く哉　筑後 官葉

香井に居して

花咲て雪の井なかる居哉　長崎 李童
豆腐ふ居千鳥なれ磨の声　紀州 胡蛍
川音や白きを居の月見哉　八丈嶋 凡笛
虫の音ハ心とゝ無す降夜哉　加賀 千代尼
ひとつ家の猫も帰れる寒き哉　會津 羊化
小春まて京て見て垣の梯　仙臺 巨石
榛摘しい石の鳥居や苔の花　擬司
袖の香乃下戸といへぬ柚哉　緑水

象外の脊に遊ひし鳴かな　古道

爲日を染てかゝる世百日紅　遠江　稲牛

むともかまるゝ挽る世ぬ暦かな　南部　挖圃

梅先を妬まえて尽乃涅槃かな　松坂　投茶

寛頷を俊兎に遊ひて牡丹哉　常陸　柿哲

行秋や藜を杖にすがりつゝ　青牛

夕立やあるしに晴るゝ人乃声　麻石

入日の色をかへるに雲雀かな　松林

ゆふ顔や意識る身も[illegible]乃数　萬給

永く笠に晴るゝ田植かな　上総　吏仙

むかしも荒るゝ戸に風も面白し　谷戸

十六夜や出そめし峰の松　可穂

採に百匹も打花樹かな　下総　儀江

葉桜に織の香を残りけり　巴蓼

初唐や吉信山の片しぐれ　巴水

田子の浦に出く足音も照射かな　鷺泊

しらなみに[illegible]流れて冬の月　武蔵　帰景

捨舟に躍る魚ありも長の冬　髙叟

紅葉やまだ此比乃年わすれ　西羊

橋ありやなしや鵆に鳴鮭　摂 石髪

資朝の人をひとまね柳乃雪　遠江 蓼生

口上乃答衆もしらず粽かな　駿河 耳得

濃くて月さへ見えぬ白もち　竒峰

何卷此中にこぼるゝ河豚汁の身　洛梅

芥子の花乃ちるで五日月くらき　几子

星合や搗ゐてあるぞ又大井川　阿人

かきつ子の鮭なをし仏生會　令亀

此一小冊子は深山某の都の風流家の人々の
まよひゑのくるを何して旅となし世に
ありかりの閣にあまたを宿山外に慶多
さうしかれとむかしの聲のうるさ程なきと
ならへうなりしかんのはん此りぬ

雪中菴蓼太書

安永四乙未歳

幸堂私印

[illegible]

近路[illegible]

[illegible]

書[illegible]